

文 ヴィーナス・ウォン

## 文字に思いを託して

中国南部に、女性だけが用いる神秘的な文字が存在する。女書と呼ばれるその文字に秘められた果敢な抵抗の歴史には、尽きせぬ魅力がある。



湖南省の江永県は、この地にゆかりのない人にとつて、取り立てて印象に残るような場所ではない。田舎の小道や山道ですれ違う農婦は、広大な中国に無数にある小さな町や村で暮らす女性たちと、何ら変わらないように見える。しかし、深く澄んだ碧色の水が静かに流れる瀟水と呼ばれる川に沿って、湖南省と広西チワン族自治区と広東省が境し、漢民族とヤオ族の文化が融合するこの地域では、女性が自分たちのためにつくった文字が、何世代にもわたって伝えられてきた。それは、男性が立ち入ることのできない、伝統の世界だ。

この手書きの文字は、女性たちが手ずから縫い綴じてつくる本や、紙片、扇子などに記される。スカートやハンカチに刺繍されることもある。菱形にやや傾いた文字は、一字一字離して書かれる。字形は繊細かつ優美で、楷書体のようにも、また古代の甲骨文字のようにも見える。詳細に見ていくと、刺繍の模様に近いものもある。女書の文字は、いわば秘密の符号、暗号のようなもの。教育を受ける機会を与えられず、結婚の自由もなかったこの地域の女性たちが、互いに意思の疎通を図り、自己表現の手段を得るために生み出したものだった。女書と呼ばれるこの文字は、まさに文字通り、女性の文字なのだ。

この10年で、研究者によって、500点以上の女書作品が収集され、総文字数30万超のうちに、2000字以上が特定されている。女書の文字は記号に近い。文字に決まった意味はなく、そ

れぞれさまざまな書き方や発音がある。文字が表す意味は、文になった時に初めて明確になる。女書の文は7文字で構成されることが多く、江永地方の方言で歌われる。

女書の文の多くには、身に降りかかる理不尽さへの恨みつらみが綴られている。そこには、日々の暮らしのなかで感じる悲哀や失望、女性同士で支え励まし合う喜びや安堵、姉妹のように親しく交わった相手と離れ離れになる寂しさなどがしたためられている。両親に心から感謝を伝える歌詞もある。社会的な接触を経験し、独創的な芸術を密かに共有することで、女性たちは強くなれたのだ。女書が江永県一帯に集中している理由について、女性や姉妹を祝う祭事や特殊な風習があり、女性が女書の民謡をつくり、人前で披露することが認められているヤオ族の文化が影響していると考える学者もいる。

この地方の女性たちの芸術愛に興味を抱き、女書が生まれた経緯に感銘を受けた台湾の舞踏家、譚惠貞は、2011年に江永県を訪ね、この文字について調べ、学んでいる。「女性にとつて、自由のない当時の暮らしは耐え難いものでした。そこで、田畑を耕し、家を守り、肉体労働をこなし、与えられた役割を果たしながら、お互いに感情的な交わりを持てる豊かな精神的領域を構築したのです。女書は、そういう個人的な要求を満たすために生み出されたのだでしょう。教育を受けることを許されなかった女性たちは、自分たちの感情を表現する場所を求めて、他人に見とがめられることなく自

PHOTOGRAPHS: GETTY IMAGES, BRIDGEMAN IMAGES

社会的な接触を経験し、独創的な芸術を密かに共有することで、女性たちは強くなれたのだ。

由に意思疎通できる方法を編み出しました。これは、本当にすごいことです」と、彼女は語っている。

1990年に他界した女書の伝承者、高銀仙の孫娘のもとで学んだ譚惠貞は、女書のことをモチーフにしたモダンダンスを創作し、世界中の観客が、その秘められた世界に心を揺さぶられたと語る。「女書が消滅してしまうのではないかと心配しています。私の作品が、記録として、将来の世代のために役立つとよいのですが。自分たちの言語をつくるという進取の気性を持った素晴らしい女性たちのことを、広く世界中の人たちに知ってもらいたいですね」。彼女は舞台上立って、女書作品の数句を吟唱している。それに合わせて瀟水とこの地の習俗が放つコンセプチュアルなイメージを融合させたダンスを

披露しているのだ。

女書の影響は、これにとどまらない。湖南省出身で、映画「グリーン・デスティニー」や「HERO (英雄)」の音楽でも知られる作曲家の譚盾は、21世紀の観客に向けて女書の由来を語り伝えるマルチメディア作品「女書… [The Secret Songs of Women]」を作曲している。これは、母と娘や姉妹にまつわる切ない物語を13のマイクロフィルム映像と音楽で綴った作品で、人類学、音楽学、哲学、歴史が渾然一体となっている。

女書の歴史には、研究者にとって大きな謎が残されている。女書の起源は、秦の時代あるいはそれ以前まで2000年以上遡ることができる、と考える学者もいる。その一方で、近代初期に発展したもので、明代後期また

は清代初期より古くはない、と主張する人もいる。創始者については、手先の器用な女性たちが女書をつくったという言い伝えがある。賢明な女性たちが、秘密の文字を使って相手に直接情報を伝え、危機や面倒事から免れるというドラマチックな物語も残されている。女書は、勇気の証であり、明るい未来を築きたいという願いから生まれたのだ。

女書のみを母語とした最後の伝承者、陽煥宜は2004年に他界したが、女書はカリグラフィという形で、現在も生き残っている。女書を生んだ女性の知恵としなやかさは、新しい世代に刺激を与え続けているのだ。

「パテックフィリップ マガジン・エクストラ」(patek.com/owners)にて、この記事の特別関連コンテンツをご覧ください。



女書は、  
女性だけの秘密の文字

銀仙

女書の起源について、研究者の見解は一致していないが、一説には紀元前221年に始まった秦代まで遡るともいわれる。女書を用いた作品は、その制作者が死後の世界にまで持っていけるように、本人の遺体と共に焼かれたり、埋められたりする習慣があるため、原物を発見するのは困難だ。上の扇子と本のコレクションには、女書で言葉が記されている。これらは1980年代に制作された新しい作品である。[次ページ] (右から)「太平盛世」「萬載吉祥」、大きな文字で「吉祥」と書かれている。

